紀北町

文化財
紀北町

大昌寺・格子絵天井

紀伊長島区、赤羽の大昌寺境内にある不動堂の天井は、江戸時代後期に奉納されたと伝えられる百歌仙を描いた極彩色の板絵がはめこまれた格天井となっています。

絵を描いた絵師の名も、正確な年代も、記録が残されておらず不明ですが、残された奉納者の姓名などから、江戸時代の嘉永、安政年間（1848～1859年）に奉納されたものであると推定されます。

1枚1枚には、百人一首と43首の古今名歌が書かれ、さらに作者像が彩色で描かれているという見事なもので、143枚の格子絵が整然と天井にくりひろげる様は壮観です。山部赤人、紀貫之、柿本人麻呂、小野小町等の名だたる歴史上の歌人の歌と肖像画が、このような山間の小寺のお堂の天井に極彩色で残されているのは、県内では貴重な文化財といえます。

格子絵天井（紀北町教育委員会提供）

【→P110＊24】

▪ 地域の人々が残した文化遺産を探してみましょう。

祭り
紀北町

船山車

毎年正月15日に行われる紀北町の長島神社の例祭は、鰹釣りを模した船山車が町中を練ることで知られています。

鰹船を形どった色鮮やかな「だんじり」に30名ばかりの若者が乗り込み、ところどころで船をとめ勇壮な鰹釣りを再現する、漁師町ならではの大漁祈願の祭りです。

従来、「まつり」は、豊漁・豊作を神に祈ったり収穫を神に感謝したりすることなどがその主要なものでした。漁業を主とする浦では新春に豊漁を祈願する祭りが多く、田畑での生活が中心となる村々では、秋の取り入れがすんで、収穫を神に感謝する祭りが多くあります。

この「だんじり」の決まりを定めた文書「団尻仲間定」に1746（延享3）年の年号があることなどから、この「だんじり」が江戸中期から行われていたことや、当時すでに町内に自治制がしかれ、合議制が進んでいたとみられることなどがうかがえます。

船山車（紀北町教育委員会提供）

【→P110＊25】

▪ 自分の住んでいる地域の身近な祭りについて調べてみましょう。

民話
紀北町

種まき権兵衛

海山区便ノ山の宝泉寺の境内に、次のような内容が刻まれた碑があります。それは、「権兵衛、姓は上村氏、兵部の子。父にしたがって砲術を学び、ついに名手となる。成長するにつれ性格はさっぱりしていて堂々とりっぱで、村人は彼のことを種まき権兵衛と呼んだ。その頃、馬越峠の山中に大蛇が住みつき、村人や旅人に危害を加えていた。藩主は権兵衛をよびよせ、銃を与えて、大蛇を退治するよう命じた。権兵衛はこの命令を受け、意を決して、自分の命とひきかえにこれを退治した。」というものです。

民話『種まき権兵衛』のモデルは、江戸時代に実在した人物です。村人たちは、権兵衛さんをねんごろに弔い、彼をしのび今に語り継いでいます。今、権兵衛の屋敷があったとされる便ノ山の田畑の中には、屋敷跡の碑が立てられています。

権兵衛洞門レリーフ（紀北町教育委員会提供）

【→P110＊25】

▪ 自然と共に生きてきた私たちの祖先が語り継いできた民話について、調べてみましょう。

食べ物
紀北町

押し寿司

押し寿司は、紀北町を中心に、尾鷲市にかけて伝わる行事食です。古くから、結婚式や棟上げなどの振る舞い、祝い返しの配り物として作られてきました。ハレの日の食事とあって、彩りの美しさが特徴です。酢で締めた魚の身、ニンジン、ゴボウ、薄焼き卵などの具を並べ、すし飯と交互に3～4段重ねて作ります。具に使う魚は、サンマやサバ、カマスなどが定番です。

1人で作ることはまずなく、1人が具を並べ、もう1人が押す。元来、隣近所が集まって大勢で作るものでした。具とすし飯の美しい層のその1段1段に、喜びを分かち合うみんなの思いが詰まっているようです。少し甘めで、素朴な味わい。それぞれの具がうまくなじんでいます。

ひと切れでも満腹、おかずがなくても魚や野菜が食べられる、防腐作用のある葉を敷くことで日持ちもする、まさに理にかなった食べ物です。【→P80】

押し寿司（紀北県民局農水商工部提供）

【→P110＊24】

▪ 古くから郷土に伝わる料理は、先人たちの知恵と工夫の賜物です。あなたの町の“ふるさとの味”について調べましょう。

COLUMN
コラム

アカウミガメの大切なふるさと「三重の海浜」

三重県の海浜には、毎年たくさんのアカウミガメが産卵に訪れます。今まで、南は紀宝町の七里御浜から、北は川越町の高松海岸まで産卵が確認されています。アカウミガメは、6月頃から8月頃にかけて、三重の海浜に上陸し、海浜に穴をほって産卵します。卵は8週間程度で孵化したあと、赤ちゃんウミガメは夜を待って砂浜にはい出して海に旅立っていきます。

実は、北太平洋のアカウミガメの産卵地は日本の太平洋側の海浜だけで、その中の一つである三重の海浜はとても大切なふるさとなのです。

残念ながら、埋立や堤防の設置等による海浜の直接的な開発や、ダムなどの治水・治山事業等、河川からの土砂供給の減少による海浜の衰退により、アカウミガメが産卵できる海浜は減少する傾向にあります。また、夜間の人工照明により、親ガメが落ち着いて産卵できなくなることや、赤ちゃんガメが光に惑わされて海へ行けなくなるのではないかとの指摘もあります。

アカウミガメを守ろうと各地で様々な取組が始まっています。七里御浜では産卵時期の車の乗り入れを規制していますし、志摩半島から津にかけての海岸ではウミガメパトロールや、台風等による卵の流出などを防止するための移植作業などの取組がされています。【→P24】

アカウミガメ（紀宝町提供）